小島信夫

実感・女性論

講談社文庫

講談社文庫

実感・女性論
小島信夫

昭和49年1月15日第1刷発行
昭和51年7月20日第3刷発行

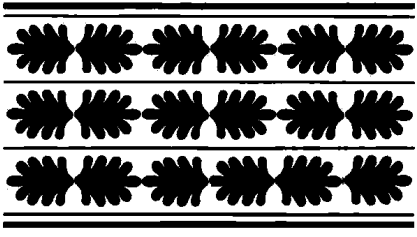
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京　8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社大進堂
© Nobuo Kojima 1974
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

講談社文庫

実感・女性論

小島信夫



講談社

目次

第一章　ある晴れた朝の男の憂鬱　7
第二章　男には必ず自分の歯ブラッシをあてがうこと　24
第三章　女の「論理」というもの　38
第四章　眼をつぶるという油断ならぬ女の性格　50
第五章　女はなぜ「ムズカシクてわからない」というか　65
第六章　女の中にある、男を無作法にさせるもの　72

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第七章　情事のうら悲しい報酬について――私の姦通論――　84
第八章　続、情事のうら悲しい報酬について　101
第九章　女の攻勢に対する男のコソクな手段　111
第十章　女独りで生きるということ　123
第十一章　まったく話し合いのない男と女たち　134
第十二章　弱い性は強い性になり得るか――アメリカの女の場合――　144
文庫版あとがき　156
新版のための序　159

実感・女性論

第一章　ある晴れた朝の男の憂鬱

私は、ある晴れた朝、食卓についていると、妻から、どうしてそんな顔をしているのよ、何が気にいらないの、といわれて、あっと思うことがある。そういうとき、私は自分がそういう顔を見せたことに腹が立ってならない。というのは、私としても、一日の朝は楽しく快活に出発しなければならない、と思っているからである。

それなのにいったいどうしてこんな顔を見せてしまったのか。自分にも分りはしない。分らないけれども、何か返事を早速にしなければ、と心がせくのは、胸に企みをもっていると思われるからである。理由はさがしても何もありはしない。ある晴れた朝、このように一家食事をしている、こんなありがたいことはないのに、吹きこんできた、憂鬱の風はあまりにもきまぐれで、私にもさっぱり分らない。食卓の上に並べてあるものに不服があるのか。いや何もありはしない。第一、私には何がそこに置いてあるのか、私が何を食べているのかあまり関心がないのだ。私にはせいぜい、ああ、こんな匂いの食物だな、少しすっぱいな、というふうに思うだけであるのだから、いうとすれば、これは少し塩がききすぎてはいないか、といったようなことである。

ところが、私がほんとに塩がききすぎているから憂鬱になったとしたら、私はもっと早く「塩

がききすぎている」と叫んで、たちまち妻と今頃さかんに口論をはじめており、塩かげんから、互いの欠点をならべあげて、もはや食卓は戦場と化してしまっているのだ。

私は今、そういうことで、憂鬱な状態になっているのではない。私は何秒かの後、いや僕は何も気に入らないことはない。何でもないのだ。と答える。でも、そんな顔をされたら、何もかもブチコワシだわ。男らしくない。ハッキリいったらどうなの。きっと何かあるのにゴマカそうとしているのだわ、と彼女はつづけていう。私はついに、何もない。何もない。僕も自分の顔を二色や三色見せる自由をあたえてもらいたいものだ、と叫んでしまう。

私はいぜんとして分らない。分らないままに、靴べらを使わずに靴にムリヤリに足をつっこみカカトが靴の尻をおしつけているのを知っている。そればかりではなくこんなことではただでさえ靴の尻は糸が切れて、三枚の革にわかれているのに、一層靴の寿命を早めるだけだ、と思う。その修理代はけっきょく私が家へ入れる金から支払われるのだから、損をするのは、私にきまっている。でも私は、次にドアを音のするように閉める。ドアはそうでなくてさえ、蝶番からネジ釘がうきかかっているのだから、いつか私はこの分だけ正確に損をすることになるに決っている。

私はつまらぬ会話をしていたために、バスにのりおくれてしまい、タキシイを拾うことになる。こうして車の中で徐々に私は家の中の今朝のことを客観的に考える余裕ができてきて、まったくおぼろげながら、私の憂鬱の原因が分ってくるような気がしはじめるのである。

私はちょっとここで、ある晴れた朝、食卓での夫の憂鬱というのは、何も私にかぎったことではないということのために、これに似た例をもう少しあげさせてもらうことにする。

私がアメリカで見たある漫画に、夫が朝の食事を待ちながら、新聞のかげに顔をかくしている絵がある。妻はふりかえって、夫の方を見ているが、何分にも新聞のかげにかくれてしまって夫の顔は見えない。そこで妻は、「あなた今朝は何が不服なの？」といっている。

この夫は、新聞を見ているので、不服なぞないと思っているにちがいない。しかし妻からすると、自分からしきりをつくって顔を隠蔽してるのは、何か面白くないのではないかと思いもするし、あるいは、そういってみたくなるのだろう、と私は想像する。

しかし、それでいて根本には、妻の敏感な洞察のごとく、夫は、そのとき、やはり何か不服だったのである。

私も、その漫画の中の男も、女性が不服でないのが、つまり、幸福そうに、朝の食卓の準備をしているのが、面白くないのだ。といったら、諸君は何という身勝手なアマノジャクと立腹されるであろう。誤解を招くといけないから、もう少し考えさせてもらうと、それはこういうことになるらしい。

読者はたぶんそういうときには、昨夜、円満な夫婦生活があったと考えていい。そういうことのあった翌朝、晴れた朝、女性は、人生というものは、自分の思う通りだ、という錯覚を多少もつもののようだ。といっても、人生などというものは、女性にしてみれば、通常はそこに鼻をつき合せている者、つまり主人と子供とによってえがく空想であることは、当然である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

女性はそこで、男は、こうして朝食をとれば、外へ出て懸命に働き、上の者から認められ、どこへ行っても受けがよく、同輩を追いこして出世をし、子供は有名校に入り、これまた出世をし……自分は……。

そのような朝、女性がかいがいしく働く姿は、自分にかいがいしく時に図太く働くことを強要していると男は感じる。

したがってこのような女性の楽しさは、男にとっては、かならずしも楽しさとならないばかりか、いいかげんにしてくれよ、といった不埒な気分にさえなるのだ。

このような気分を表現するとしたら、その男のいう言葉は、なんというケチな矛盾にみちた、悲しげなものとなるだろう。

「あんたの楽しいのが、楽しくないんだよ」

それなら、私は常住不断、女性が悲歎にかきくれて、「あなたは私を不幸にしてしまったわ」と呟やくのをいい気持できいているか、というと必ずしも、そうではない。私は車の中に腰をおろし、やがて国鉄電車にのって、乗客といあわせ、そこにも、妻でない女性の姿を遠く近く見たり、あるいはほのかににおってくる香水の匂いをかぎながら、私は日本中の女性を幸福にしたい。彼女らを一人として歎かすことがあってはならない。そのためにはどんなことでもせねばならないと思うのである。

私はそういうとき、女性の幸福とはそもそも何であるか、ということも忘れてしまっているこ

とは勿論だ。私はある駅でおりる。私の前を一人の女性が歩いて行く。私はその姿を美しいとさっきから思っており、暇さえあれば、それを見るだけでも、どこまでもついて行きたいと思っている。私はこの人を幸福にしてあげたいと、（その本人とは無関係に）そう思っているのだ。

私はその女性が自分の妻でないことに、何かの拍子に気がつく。そうして妻が、その女のように、赤の他人であってくれたら、やはり自分もこれに似た気持になっていたであろうと思って、そのふしぎさに、思わず唖然としてしまうのである。

こんなありさまであるから、私の妻が不幸であると呟やくとき、私がどんなにおどろきあわて、悄然となるか、ということは御想像願えると思う。

どの家の主人も、ときどきこうした言葉を妻が口にするとき、どのように応答するのだろうか。

「ほんとに誰々さんとこの奥さんは幸せだわ」

私の妻は、たぶんそのとき、ただ何げなく感想をのべただけであろう。何日も何日も思いつづけたあげく、最後的通牒のように叩きつけたわけではなく、私をゲキレイし、尻をちょいと叩こうとしただけのことであろう。

しかし、私はそのとき、火のようにもえさかって、

「よそはよそだ！」

と叫ぶ。よそはよそだ、と思っているわけではないが、私にはそれ以外のことをいえば百万言も費さねばならないし、もし費しているうちにこちらがタイクツしてしまうであろう。いや相手

の方は、また始まったぐらいに思って、私の話がまだ目下進行中なのに、自分の話をはじめ、お互いにきき手のない話をたたきつけあうことになってしまう。私はそうして、その言葉のぶつかり合いの凄じさに多少冷静に立返えり、話というものはきき手があって話すものだ、ということや、きき手がないばかりか、別の話がこちらに向って矢の如く射られてくるうえに、女性の話はきいてやらねばならぬ、といって道徳が頭をもたげてきていらぬ世話をやきはじめるので、私はあきらめてしまう。

私は妻の思う壺にはまりこんでしまう。なぜかというと、私は自尊心というか、男の意地というか、愚かしいものが人並以上にあるおかげで、「よそはよそだ。あの人に貰ってもらったらよかった。今からでもおそくないぞ」と叫びながら、心の中では、どうしてこの女を満足させたらいいか、といったことを既に考えているのである。

私はまんまと壺にはまりこんだことを十分に意識しているので、ハラワタは煮えくりかえるようにわきたっているが、いくぶん進歩的である私は、

「それならおちついて相談しようではないか。どこまで僕ができるか、お前の要求通りに行くとはかぎらないが、話し合おうではないか。その前にお茶をいっぱい飲ませてもらいたい」

私はそういいながら、待てよ、これは、ちょっと上役のいう言葉だな、と思う。私は勤め先ももっているが、上役はこう私にいうことが屢〻あるし、私はまた下役に、こういうことが屢〻ある。いつのまにやら私は、民主主義的方法をすべりこませていて、コッケイなことに気づく。

わが妻はそのとき、私の敗北を十分に見てとったので、敗者はすなわち、人に命ずる資格は毛

頭ないと信じているのか、席を立とうとはしない。私は無念に思いつつ、自分で茶をいれに行く。ところが、どうだろう。私が男のくせに茶を自分でいれに行くということは私が敗者であることを、みずからよく自覚した、と彼女は思うのだから、私は席にもどったときには、全面後退をせねばならない準備がもうできてしまったことになるのである。

私はこんなとき、神も仏もないものか、とつい思う。神や仏とまで行かずとも、せめて審判官がいて、正当な勝負をきめてもらいたいと思う。しかし私はそこでまた男の意地というものをもっている。自分の夫婦のことで他人に嘴を入れられるなら、いかなる譲歩を妻にしてもいいという考えがある。

私はそんなとき、ちょっと前に見た映画を思いだす。（いや新聞の記事でもいい）華美ずきな女にミンクの外套をねだられた男が、ある日デパートから盗み出す。外套を着せたと思ったとたん、捕まってしまう。彼女は夫に軽蔑の眼を向け、入獄後ほかの男といっしょになる。私は自分の妻が華美ずきでも何でもなく、正々堂々たる理由や目的をかかげていることを百も承知でありながら、ふいと感傷的にこんな状景を思いうかべ、その空想的連想を即座にひっこめて、何くわぬ顔をするのである。

ところが私はその頃から、次第に相手が幸福感を六分目ぐらいとりもどしはじめたことに安心し、自分の劣弱さに涙を流すような気分になってくる。涙を流すということは、いつも快いことだ。そうして私は、今の妥協が自分のこととは無関係な一般的な楽しい話のように思えてくる。

私はもう、街頭の見も知らぬ女性の姿を追って、この人を幸福にしてあげたら、と勝手なこと

を考えているのとおなじ状態におちこんでしまっているのである。

その後如何様なことになるか、読者の御想像にまかせるが、何むかも終ったあと、私は一人天井を仰いで、そこに大工の作った天井というものが、落ちもせず宙にういていることなどを夢うつつで眺めているうちに、ようやく我にかえる。

あくる日、よく晴れた朝、私の家の楽しかるべき団欒的食事がはじまろうとしている。にもかかわらず、私は顔を洗ったまではよかったが、実さいの団欒的風景の渦中に自分をおくと、ひとりでに私の顔は歪んでくるといったぐあいである。

私はある日友人の電話をうける。彼は私に自分の妻君が君に会いたいといっている。暇のときに来てくれないか、という。その用事はそれだけきいただけで分っている。私はもう度々彼の家へでかけているからだ。うちあけていうと私は審判官になりに行くのだ。私はどちらにも軍配をあげずにもどってくる。

彼女はすべての女と同様に、夫に対する一種の戦術を心得ていた。これはもう一度や二度でなく、実地に応用されて、その都度レムブケー氏を狂憤させたものである。ユリヤ夫人の戦術は、相手を軽蔑し切った無言の行で、それが一時間、二時間、一昼夜、時とすると、三昼夜ぐらい続きかねないことがある。たとえどんなことがあっても、夫が何を云おうと、何をしよう

と、三階から飛び下りるとて窓へよじのぼろうと決して何も云わないのである。感じの鋭い男にとって、我慢の出来ない戦術なのである！

（ドストエーフスキイ「悪霊」米川訳）

ドストエーフスキイはこんな鮮かな文章もかくくらいだから、彼もまた、この無言戦術に苦しめられ、「感じの鋭い男」であったので、狂憤しぐったりとし、あげくの果て、妻に跪まずいて、どうか、一言でいいからしゃべってくれ、と嘆願したにきまっている。

女の無言戦術というものほどおそろしいものは、男にとって、ほかにないだろう。そういうとき、私達は、よく映画にでてくるように、女の肩をもって、こっちを向かせ、弁解めいたことを口にしながら、何とかしゃべらせようとし、食うためばかりではなく、話す器官であるその口をきっと見つめ、そこから言葉が出てこないか、と期待するのだ。しかし、もし、男の力をもってしても、肩をこちらに向けさせることが出来ぬとなれば、こちらが向う側へまわらねばならない。そのときまた女は肩を一回転させる。男がこうして動物園の熊のようにぐるぐる動きまわるときの、やるせない気持は、まさに狂憤といっていいだろう。

私はある老人を知っている。この男は、病人である。彼はその妻に何かと不満をもっていて、裏の樹で首をつろうと、たびたび企てるのである。しかしその妻はそれを放置している。私はそれを見ていて、いつもとめ役になったが、何度めかには、ほんとに死ぬのではないか、と思ったが、遂にその人は畳の上で普通に死んだ。

はたしてこれはこの種の女性の慧眼というものであろうか。それとも、レムブケー氏のよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton